



「あすなろ」

「学年通信」は、生徒の皆さんが読み終わった後、必ず保護者の方に渡してください

自分の人生を歩む

学年主任 樋口真理子

私が最も好きな舞台の一つに、劇団四季の『ゴースト&レディー』があります。まだ2回しか観ていませんが、2回目は名古屋まで足を運びました。それくらい心を動かされる作品です。

この物語の主人公は、看護の道を切り拓いたナイチンゲールです。私は以前から彼女の生き方に興味を持っていて、看護師を目指す生徒には伝記を勧めることもあります。ナイチンゲールは若い頃、自分が看護の道を歩むべきだと確信します。しかし当時、それは周囲に理解される生き方ではありませんでした。家族から反対され、戦地へ向かおうとしたときには、その思いさえ疑われます。それでも彼女は、自分が信じた道を歩み続けました。なぜそこまでできたのでしょうか。私は、それが「自分の人生だったから」だと思います。

誰かが望む人生を歩くことは、ある意味では楽です。親や先生、友人の期待に応えようとする。周りに合わせて選択する。自分で決めなくて済む分、不安も少ないかもしれません。けれど、それだけではいつか苦しくなることがあります。「本当は違うことをやりたい」「本当はこう生きたい」。そんな気持ちにふたをしていると、自分がどこへ向かっているのか分からなくなってしまうからです。

もちろん、自分の人生を歩むことは簡単ではありません。迷うこともあるし、失敗することもある。周囲から理解されないこともあります。それでも、自分で考え、自分で選び、自分で決めた道なら、その経験はきっと自分の力になります。

高校2年生は、自分の将来について考える機会が増える時期です。進学先や就職先を決めることも大切ですが、その前に「自分はどんな人生を送りたいのか」を考えてみてほしいと思います。ナイチンゲールのような大きな使命でなくても構いません。自分が大切にしたいこと、自分らしくいられることを少しずつ見つけていく。その積み重ねが、自分の人生を歩むことにつながるのだと思います。

10月の主な行事予定

- 10月 1日(木) 後期開始 服装調整期間(～11/30)
2日(金) ▲カセット
3日(土) サタチャレ(1・2年)
6日(火) ▲カセット
7日(水) ⑤⑥授業公開(全学年)※午前4時間・5分短縮授業 昼 SHR・清掃
神無月文化祭(放課後)
15日(木) ▼カセット
17日(土)・18日(日) 新人大会
19日(月) ⑥⑦ミニ大学(2年)
21日(水) 登校時マナーアップ運動(2年)
22日(木) 2年6組 SOW 南アルプス巡検
23日(金) ▲カセット
28日(水) 植花作業(放課後)
29日(木) ▲カセット フードドライブ(～11/7)
30日(金)・31日(土) 進研総合学カテスト





【2学年リレー通信】

メリトクラシーの陥穽

2年6組担任 井上 裕紀

みなさんは、何のために学んでいるのでしょうか。知識を身につけるため？ 自分の可能性を広げるため？ 試験で点数を取って、希望の大学に合格するため？ そうであったとして、では身につけた知、自分の可能性、環境を何のために使うのでしょうか。

一括りにすることには問題があるかもしれませんが、みなさんの多くは、相対的に恵まれた環境にあります。中学校ではきっと「勉強ができる側の人」だったでしょう。自分の力で努力して本校での学校生活を勝ち取ったと考えている人も多いと思います。そのことは否定しませんが、それは努力をすれば報われるという環境の下にたまたまいた、ということの結果でもあります。

近代社会は個人の平等をタテマエとして成立しましたが、それは格差の原因を個人の問題に矮小化することと表裏一体のものでした。昨年度の歴史総合の授業では、日本近代史学者、松沢裕作の『生きづらい明治社会』（岩波ジュニア新書）を題材に、身分制が崩壊したことで人々は「自立した個人」として生きることが求められ、その結果、失敗、没落は個人の努力不足によるものであるとする自己責任論が芽生えたことを扱いました。平等な個人が自由競争の下にさらされたことで結果として生じた格差は自己責任だとされたのです。

残念ながら、学校にも、ある部分でこのような自己責任論を強化し、人々をメリトクラシー（能力主義）の陥穽にはめてしまう側面があることは否めません。勉強ができるのは個人の努力によるもので、勉強ができないのは努力が足りないからだという発想。大学を偏差値で配列し、その優劣が絶対であるかのような価値観も根強くあります。

しかしながら、「自分の努力でその地位を勝ち取った人の極み」が集まっていそうな場所である東京大学は、「努力すれば報われる」「失敗は個人の努力不足」という考え方が欺瞞的で格差を正当化してしまうものであると度々指摘しており、メリトクラシーの陥穽に陥ってしまうことに対する警鐘を鳴らしています。2020年度前期入試の国語で引用された社会心理学者、小坂井敏晶の著書は、近代社会における平等が虚構にすぎず、社会的な格差を個人の努力不足の問題に転嫁するものであることを題材にしています。2019年度学部入学式では、ジェンダー論を専門とする社会学者、上野千鶴子が登壇し、タテマエ平等の社会のなかにひそむ性差別を紹介し、頑張ったら報われると思えること自体が、努力の成果ではなく環境のおかげだったこと、世間には頑張っても報われない人や頑張ろうにも頑張れない人がいることに触れたうえで、次のように述べています。

「あなたたちのがんばりを、どうぞ自分が勝ち抜くためだけに使わないでください。恵まれた環境と恵まれた能力とを、恵まれないひとびとを貶めるためにではなく、そういうひとびとを助けるために使ってください。そして強がらず、自分の弱さを認め、支え合って生きてください。」※

冒頭の問いに戻ります。みなさんは、何のために学んでいるのでしょうか。どうか学んだ知識が他者を見下したり、蹴落としたりするために用いられるのではなく、様々な立場や境遇を慮る想像力や、他者とともによりよい社会を築く創造力へと発展していくことを期待します。

※出典：上野千鶴子「平成31年度東京大学学部入学式 祝辞」（https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/about/president/b_message31_03.html，2026年9月3日最終閲覧）

